

1. 松山収容所の捕虜新聞『ラーガーフォイアー』における

日本・四国関連記事について

井戸慶治

はじめに

第一次大戦期の青島から移送されたドイツ兵捕虜が収容されていた収容所のひとつ、「松山俘虜収容所」(1914年11月-1917年4月)においては、捕虜により週刊の収容所新聞『ラーガーフォイアー』が刊行されていた。その記事の中には、日本に関するものが若干ある。ここでは特に四国、松山とその周辺の地域にかかわる記述について取り上げてみたい。

松山に収容されていた多くの捕虜たちにとって収容所の待遇は満足のゆくものではなく、そのような印象が、日本と日本人一般に対する彼らの感じ方に影響しているところもないわけではない。また、そもそも捕虜という立場は、情報収集という点でもあまり恵まれた状況とは言えない。しかし、それにもかかわらずこれらの記事の書き手たちは、日本や収容所周辺の多くの事柄に関心を寄せ、自分たちの体験だけではなく、時には詳細な文献調査にもとづいて、これらの対象に関する知識や考察を仲間に伝達しようとしている。われわれは、ドイツ兵捕虜の書いたこれらの記録を通して、日本人ならあまり問題にしなかったようなさまざまなことも含めて百年前の日本の様子を知ることができるだけではない。そこには異文化との接触にありがちな誤解も少々見られるし、さらに一歩進んで外国人によく見られる日本に関する誤解を訂正しようという意図も感じられ、そのような面がこれらの記事を興味深いものになっている。

第1節 連載記事「松山」より

まず取り上げるのは、I巻32, 34, 36, 38, 39号の5号にわたって連載された長編記事「松山」である。扱われている領域は、地理、歴史、動植物、日本人の国民性、宗教、産業、教育など、非常に多岐にわたっている。書き手は、第二部の動植物などに関する部分のみクラウトケ(Paul Klautke 応召前は青島の食肉加工所検査官)で、それ以外の部分は第3海兵大隊第6中隊長のブッターザック大尉(Conrad Buttersack)である。題名になっている松山は、この記事全体のテーマというよりも調査や考察の端緒・基点と言ってもよく、調査や考察はそこからしばしば日本全体や松山の周辺地域に向けられている。はじめに主要参考文献15点を挙げており、後の部分でも参照した文献の著者を括弧書きで添えているなどの点で、少なくとも外観上、学問的な手続きを踏んでいる。それらのうち日本語の文献は2冊で、それ以外はほとんどドイツ語の文献であり、日本滞在が長くナチス・ドイツの思想にも影響を与えたとされるハウスホーファーの『大日本』や日本にきたプロテスタントの

宣教師ムンツィンガーやシラーの著作もある。ドイツ語以外の文献としては、イギリスの日本研究家チェンバレンの著作などがある。日本語文献については、戦前に日本で約3年間の滞在経験があり、優れた日本語能力を有していた捕虜将校のシュテッヒャー大尉(Georg Walter Stecher)が翻訳作業によって協力したことが、謝辞とともに言及されている。

松山周辺

まず、I巻 32号に掲載されている第1部では、日本全体の地理的状況と気候、松山の市街および周辺が解説されている。最初に扱われているのは日本全体の行政区分であり、ついで松山市とその周辺のことが客観的に描写されている。ここではまず、松山城に言及している部分を引用する。捕虜たちは三箇所の「分置場」に分散収容されていたが、いずれの場所からも松山城は比較的近く、山上にあって見えやすいことから、松山の描写の最初に扱われたのであろう。

市街地の道路は大抵北から南もしくは西から東へまっすぐ走り、松山の唯一の観光名所、すなわち実に見事な大名の城郭のある「カチヤマ」¹(勝利の山)を取り巻いている。松山公園を歩いて行くと、この町の名前の由来となった高く茂った松の間を抜けて城に至る。標高132メートルの山の上にながしりとした花崗岩の建造物〔石垣〕がそびえ、その上に三層の木と漆喰の上部構造が乗っている。巨大な門が三つあり、城内区域に通じているが、城の一番高い先端はこの街の市域を抜きんでること152メートルである。



捕虜が使用した松山城の絵葉書。(ケーバーライン資料。国立歴史民俗博物館所蔵)

¹ 普通「かつやま」と発音されている。

少し後には、道後温泉に関する記述が見られる。

東の窓からは背後に長く連なる山並みが眺められ、その山々の間に 1981 メートルのイシヅチヤマ (石のハンマーの山) が威風堂々とそびえている。この山はわれわれの住む島で標高が二番目であり、日本の他の六つの山に抜かれているだけである²。もっと手前の方に、森に覆われた低い山々に包み込まれて、日本で一番古い温泉である小ぢんまりした道後がある。丸亀からさほど遠くない有名な琴平については後にさらに言及するが、これと並んで道後は温泉のおかげで、四国で最も好まれる場所となっている。神話時代にすでに日本の二神がここで湯あみをしたそうだし、この伝説時代に続いて統治した五人の帝もこの先例にならったそうである。たいていは皮膚病やリウマチに苦しむ人々がやってくる中規模の保養地としての必要条件を、ここのすばらしい旅館、あらゆる種類の浴場、きれいな施設が保証している。泉源は、化学的成分や温度によっていろいろな違いがある。一番良い浴場とみなされるのは「タマノユ」(宝玉の湯)で、最も効能が高く、一番設備も良いとされているが、一方の「イシノユ」(石湯)は摂氏 44 度の湯温で最高の温度である。一般的には湯治は安価ではない。一人分の費用は 2 円から 3 円にもなる。

ここで道後温泉は、「日本で一番古い温泉」とされており、神々や古代の天皇たちも入浴したことが言及されている。地理的な説明にさいして、その場所に関する歴史的な出来事も紹介するという方法が、この「松山」という連載記事全体によく見られるが、このことで読み手の知的な関心をかきたてようとしているのであろう。道後は現在もっぱら観光地となっているが、この記事では湯治のための保養地としても紹介されており、旅館や施設の良さも評価されている。この引用における割注について言えば、道後温泉本館の湯のひとつの「タマノユ」という音から、書き手(あるいは書き手が参照した本の著者)は、「玉」という漢字を考えたようであるが、これは一般に「霊の湯」と表記されているので、「タマ」は魂を意味するのであろう。

松山城の窓から眺望される瀬戸内海の美しい風景については、彼らが下関海峡を経てここに至るまでのあいだ実際に見てきたものであるが、ここでも改めて評価がなされている。

大名城郭の天守閣からの最もすばらしい眺望を与えてくれるのは疑いもなく西側の窓である。われわれは帰国への道をできれば早く取りたいものだが、その時の経路となるかもしれない道の一部がここから望める。一方周防の海岸の前方に大島と瀬戸内海西部が特に絵のように美しく浮き上がって見える。さらに手前には、すでにわれわれが知っている港町三津浜と高浜を目にする。高浜のすぐ背後には収容所からも見える「小富士」がある。興居(ごご)島のこと

² この部分は誤りで、石鎚山は実際には西日本の最高峰であるから、四国では最も高い山である。また、日本全国となると、石鎚山よりも高い山は六峰どころではない。

を地元民はよくこう呼んでいる。(Ib, 139-143)³

ここで「絵のように美しい」と賞賛されている瀬戸内の多島海の風景を、捕虜たちは後に板東俘虜収容所に移ってからも、海岸への遠足のさいに見ることになる。

日本と松山周辺の歴史

次にI巻36号の「松山」第3部から、まず日本の歴史を扱った部分を引用する。ここでも最初に松山城が言及されている。

当地の城からは美しい眺望が得られるが、それだけでなく城自体にも多くの興味深い点がある。この城塞は四方に向って頑強な様子でそびえている。実際の戦いがあった時代には、その敵にとって攻略しがたい要塞であったろう⁴。その足下には広場があって、そこには現在近代的な兵営が置かれている。広い堀がこの地区とその他の市街とを分かち、大名の士卒たる侍を突然の襲撃や非常な困窮に陥ったときに守るものとなった。



松山城から見た兵営と市街。両者を分ける境界は、城の堀に沿って植えられた松並木である。Fのような印が分置場のひとつである公会堂。ここに収容されていたケーバーラインが使用した市販の絵葉書。(ケーバーライン資料。国立歴史民俗博物館所蔵)

³ 『ラーガーフォイアー』の引用については、鳴門市ドイツ館史料研究会（田村一郎、川上三郎、最上英明、依岡隆児、井戸慶治）による未刊行の共訳を使用する。各部分の翻訳責任者は決まっているが、ここでは特に表示しない。この捕虜新聞には、松山で刊行されたタイプライター版と板東で刊行された謄写版印刷による版の二つがあるが、ここでは後者を定本としている。板東版はのちに三分冊で製本されたが、I巻1号から25号までを含む一冊目と26号から50号までを含む二冊目、II巻1号から13号までを含む三冊目からなっている。引用の出所表示に関しては、上の三冊をIa, Ib, IIとし、その後に頁数を表記する。

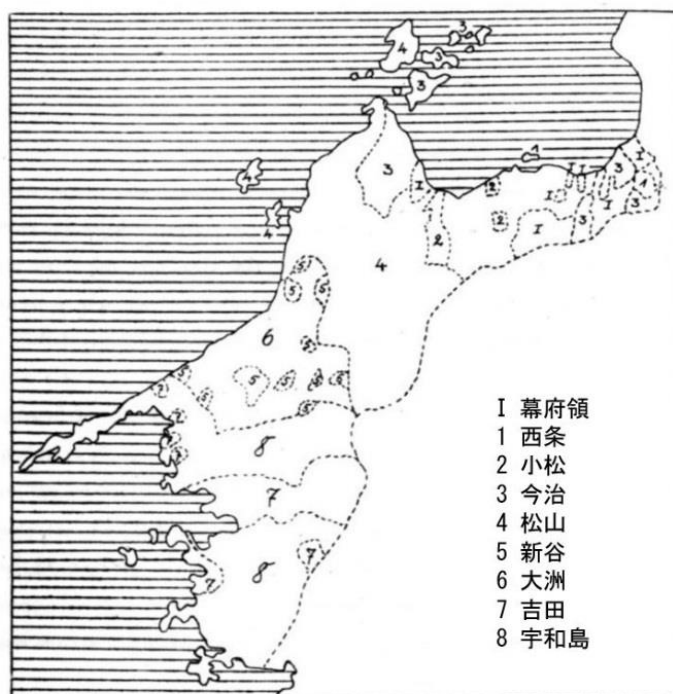
⁴ 松山城は江戸時代初期に建造され、実戦の舞台になったことは一度もない。

ここから、日本の歴史全体が概観されるが、その後に伊予の国の幕末における状況が図入りで説明されている。

この新しい時代、いわゆる「明治時代」(1868年11月6日)⁵のはじまる少し前の伊予国の政治的状況は図(伊予の大名領)の示すとおりである。

これは当時の日本全土の状況を推察させる点で、特に興味深い。信じられないほど領土が入り乱れているが、それは17世紀のドイツを彷彿とさせるものである。もっとも、ドイツの分裂ぶりとつながりの無さは、1869年の日本どころではなかったけれど。

1869年ごろの大名領(伊予)



明治初期の伊予の大名領。日本語の文字は翻訳者が書き添えたもの

ここでは松山のみならず愛媛県全体の歴史への言及がなされており、江戸時代の幕藩体制下における伊予の国の大名領が図入りで解説されている。書き手は、比較的小さな諸藩の領土が混在して複雑に入り組んでいるさまを17世紀のドイツの状況と類似しているとして、捕虜仲間である読者の理解の助けにしようとしている。

日本人の特色

⁵ 重要な事件のないこの日が挙げられている理由は不明だが、6月11日の誤記であるとする、この日、明治初期の政治大綱を定めた「政体書」が發布された。

歴史に続いて「住民」の項では、日本人の特色について幕末以降の来日外国人によるさまざまな説が紹介されている。まず日本人は、身体的見地からすれば一様でなく複数の民族の混血によって成立した民族であることが、ベルツの言説などを参考に述べられている。次に日本人の精神的特性については、書き手が参照した文献の筆者などの意見が要約、列挙されている。長所の指摘もあるが、真の独創性を持たないなどネガティブな見方も提示されている。

イエズス会士ザビエルは、16世紀中葉に日本にキリスト教をもたらした人だが、日本の民に出会ったことが魂の大いなる喜びだと述べている。彼は日本人を、大胆で、英雄的で、復讐を好み、名誉欲を持ち、勤勉で、非常にきれい好きで礼儀正しいと特徴づけている。

作家のオールコック(1860)は、日本人が勇敢で、礼儀正しく、陽気で娯楽を好む民族、情熱的というよりむしろ感傷的、ウィットに富んでユーモアがあり、理解が早く、敏感で発明の才があるが、高度な知的行為への能力はほぼなく、精神的受容力があり、知識欲が旺盛である、などと述べている。

ドイツ人宣教師のムンツィガーも同様な結論を得ている。才能は大いにあるが、天才はほとんどいなくて、勤勉で、器用で、实际的で、それにいくらか皮相的で、深みがなく、独創性に欠ける等々。嘘は、日本ではドイツにおけるように恥知らずな人間の特性というわけでは全然ない。日本人の言葉はまっすぐ直(ルビ:じか)に出てくるのではなく、持って回って言われるため、何を言いたいのかまったくよくわからない……

ハウスホーファー少佐は、疑り深さ、怠慢、秘密裡の探索、紋切型、隠し立てといった性向がほぼ300年間にわたる警察国家⁶の名残だと言う。さらに脱税、収入と営業利益の虚偽の申告が数知れずあることを指摘し、それが貴顕高官の人々にまで浸透しているとする。

デーニヒは日本文学をもっともよく知るひとりだが、日本人の精神のもっとも際だった特徴のひとつとして、あらゆる種類の形而上学的、心理的、倫理的問題に対する関心の欠如を強調している。

長年にわたって東京大学教授をつとめたバジル・ホール・チェンバレンは、長らく日本人の中で外国人として暮らしてきた人々による評価を6点にまとめている。一方には「清潔さ」「善良さ」「繊細な芸術的嗜好」があり、もう一方には「うぬぼれ」「実務にそぐわない習慣」「抽象思考ができないこと」を挙げている。

私にはこの評価やその前に挙げたほとんどの評価(これにはもっと多くのものを追加できようが)は、楽観的すぎるように思われる。最終的な結論に至るには、個々の属性についてそれがどれほど明瞭なものかもっと考慮すべきであろうし、ほとんどのわれわれにはそのために必要な経験が欠けている。いずれにしろ、以下のようなことは確かである。われわれゲルマン人にとって日本人は好ましさを感じられず、東アジアの全ての民族の中で一番好きになれない。

⁶ 江戸時代の日本の状況を指す。

(Ib, 207-209)

どうやら少なくともこの時点ではあまり日本人に好意的でない筆者のブッターザックは、ネガティブな意見の方に傾いているようである。とはいえそうした見方については、必ずしも否定できない面もあると思われる。この部分で四国に関連する記述としては、以下のものだけである。「ハウスホーファーによると、四国、特に土佐には南国的な性格をそなえて気性が激しく、精力的で頑固な人々がいる。」(Ib, 209)

途中言及されている日本関連の文献の著者たちについて簡単に触れておく。ベルツ(Erwin Bälz, 1849-1913)は明治期のいわゆるお雇い外国人のひとりで、東京帝国大学医学部で教鞭をとるとともに、医師としても活躍し、彼の研究領域は日本を含む東アジアの民族学や草津における温泉の効能研究にまで及んでいる。ムンツィンガーとシラーは、いずれもドイツ・スイス系の伝道団体「普及福音新教伝道会」に所属するプロテスタント宣教師である。(松山と板東の文化活動の中心人物ヘルマン・ボーネルもまた、この団体に属していた。)前者(Carl Munzinger, 1864-1937)は、1889年から95年まで日本に滞在し、1918年に『日本人』を著作した。シラー(Emil Schiller)は1895年から1932年まで在日し、第一次大戦当時はドイツ兵捕虜のために全国の収容所をめぐって宗教儀式などをおこなった。ハウスホーファー(1869-1946)は、1908年から10年まで駐日ドイツ大使館付武官を務め、『大日本』など日本に関する著作もいくつかある。「地政学」の理論を唱え、ヒトラーにも影響を与えたとされるが、その後ナチスとは袂を分かち、戦後自殺する。チェンバレン(Basil Hall Chamberlain 1850-1935)は、イギリスの言語学者・日本学者で、オールコック(Rutherford Alcock)は、作家というよりも幕末のイギリス外交官として日本では有名で、『大君の都』を著した。デーニヒ(Denig)については不明である。

日本人の宗教

続いて第4部(I巻36号、38号)では日本の宗教が論じられ、個々の宗教(儒教、神道、仏教、キリスト教)についての説明がなされている。まず、日本人の宗教観についての概観部分においては、「宗教にしる哲学にしる、自己完結した世界観を構築する独自の創造的著作というものは日本で生まれたことはなかった」として、日本の宗教や哲学には「インド、中国、ヨーロッパといった外国生まれの確固たる既存の体系の獲得と適応」という要素が強いことが指摘されている。また、神仏習合の慣習についても言及されている。

日本における個々の宗教の状況に関する説明の中で、四国に関連することといえば、仏教の部分において、真言宗と弘法大師、四国八十八箇所とその巡礼のこと、そのひとつとしての道後の近くにある石手寺などが取り扱われている。この部分について、I巻38号より引用する。

神道同様に仏教もいくつかの宗派に分かれていて、大宗派12と小宗派39に区分できる。真

言宗は紀元後 806 年に弘法大師（空海）が開いたもので、四国では主要な宗派である。この創設者は中国でのかなり長い勉強の後、僧侶の地位の向上と民衆の教育に多大な功績を残した。特筆すべきことだが、日本の音節文字を改良し、アルファベットのよう形に整理したのは彼である。空海の 47 文字とは、平がなである⁷。毎年何十万人にもなるわれわれの住む島を縦横に旅をしている巡礼は、ほとんどすべて彼の信者である。彼らはたいてい春に、空海が生活し活動した八十八箇所⁸に参詣する。その際巡礼者は、200 里（3,090km）⁸ という長い道程を一定の期間内に踏破しようとする。比較的若い人は 35 日、平均は 50 日、年配者は 80 日を要する。町や村の多くの人々ができるだけ多くの巡礼を自分の家に受け入れて面倒をみるのを名誉とも誇りともしている、巡礼の大部分は、その期間中お金を使わずに生活できる。外面的な標識としてはたいてい白装束をまとい、大きな笠をかぶり、一枚の木札を携えている。その札には、自分の名前と、「同行（ルビ：どうぎょう）」すなわち「二人で」という文字が書かれているが、それは神たる弘法大師（死後の称号）に巡礼者と足並を揃えて同行してもらいたい、ということを表している。—巡礼の祈祷の言葉はわずかである。手に数珠を持って寺堂の前に立ち、拍子をとってはてしなく「南無大師遍照金剛」と口ずさむ。これはおおよそのところ、四国の最初の巡礼者であり、今では神々の中におわす弘法大師が、人の影のごとく巡礼者に付き添ってくれますように、というほどのことだそうである。—巡礼たちにとって大いに魅力的なのが、道後の裏にある美しい寺「石手寺」である。特に見事な塔と森の中に絵のように配置された本堂のような寺の建物群は、われわれも実際に目にしたものである。ここから巡礼者は山越近くにある「太山寺」へ巡礼する。

巡礼はヨーロッパにもある宗教的慣習なので、遠く離れた日本にもあるということが書き手にも読み手にも興味を引くところがあったのであろう。「町や村の多くの人々ができるだけ多くの巡礼を自分の家に受け入れて面倒をみるのを名誉とも誇りともしている、巡礼の大部分は、その期間中お金を使わずに生活できる」という一節は、接待のことをさしている。また、「同行二人」「南無大師遍照金剛」という言葉についても言及がある。四国遍路については、後の板東で刊行された捕虜新聞『ディ・バラック』² 巻 11 号において、このテーマで記事が掲載されており、『ラーガーフォイアー』よりもはるかに詳細な説明がなされている。そこでは「接待」や「同行二人」についての解説が増え、プラスアルファの巡礼箇所として「奥の院」のことも言及され、巡礼者の守るべき精神条項も、「たくさんの立派な規定」として紹介されている。板東にいた捕虜たちは、収容所の近くにあった一番札所の靈山寺の境内を借りて「美術工芸展覧会」を開催したのであるが、それについては以下のように書かれている。

寺の境内にわれわれがしつらえた射的小屋や売店、大師堂の前のわれわれの音楽隊に遍路たち

⁷ 空海が草書体をさらに崩してひらがなに近い書体も書いていることは事実だが、ひらがなの創始者とするのは行きすぎであろう。

⁸ この換算は誤りで、約 800km に当たる。

がわれがちに群がるさまは、奇妙なまでに対照的な図であった。このたびの戦争のあいだに撮られた写真の中で、霊山寺境内でのわれわれの展示会の写真ほど珍妙なものは、他にまずないだろう。⁹

『ラーガーフォイアー』の記事「松山」に戻ると、これに続く次の部分では、四国のもうひとつの見所である金比羅が、神社でありながら四国遍路たちの巡礼途中で立ち寄る重要な場所として紹介されている。また、捕虜たちが収容されていた六つの寺はいずれも浄土宗に属するという、そのことからこの宗派の手短な説明も付されている。

しかし、最大の聖地はすでに触れたことのある金比羅である。今日ここは、神道が 1872 年にわが物とした上、その大部分を破壊した諸寺院の一つである。にもかかわらず、この場所は相変わらずこの島の最も重要な聖地とされ、毎年たいがい真言宗徒の巡礼 90 万人以上が参詣している。その他の宗派のうちではもう一つ、浄土宗（1175 年開宗）を挙げておきたい。松山の仏教寺院 62 寺のうち山越のほとんどの寺院がこれに属している。（山越というのは、電車路線の北側にある地区全体のことである。）この宗派は、あまり学識のない民衆にとってそのままではなかなかわかりにくい仏教の倫理説概念をわかりやすい形にすることをその務めとした一方、教養人に対してはまたそれ相応の尺度をあてている。その他のいくつかの宗派と異なり、浄土宗（浄土＝「清らかなる土地」、涅槃（ニルヴァーナ）に至るまでの中間段階）の僧侶は説教を行い、その他キリスト教でいう教区内での活動を行っている。祈祷の言葉を単調にいつまでも唱えるのは、すべての宗派にあるようだ。少なくとも一日五回、わが寺の僧侶あるいは家族である補佐役（妻と子供）のうちの一人が、何度も繰り返す「南無阿弥陀仏」の声でわれわれを喜ばせてくれているが、これは「死に思いをいたしつつ私はあなた—仏陀、阿弥陀に沈潜します」というほどの意味だそう。僧侶はこの声に合わせてたえず鐘、木魚、二本の拍子木をたたく。（Ib, 238-240）

第 2 節 街の様子・年中行事・格闘技など

松山の街から

第 1 節で取り上げた連載記事の他にも、日本に関連する記事はあるが、この節ではその中から五つを紹介する。最初に「松山の町からあれこれ」（1 巻 5 号）という記事を見てみよう。前節における松山の説明が、統計などを基礎とした客観的な叙述であったとすれば、ここで取り上げる報告は、実際に松山の街を歩いて特に庶民の暮らしについてつぶさに見聞したことや感じたことを記した随想風のものである。書き手は、戦争前から長らく日本で暮らしていてこの国の内部事情に通じ、収容所では「日本語通」、すなわち通訳も務めたクルト・マイスナーである。この記事のはじめの方で、当時の日本の都市はどこもあまり差異がないと書かれているが、そうだとすると、ここに描写されている街の様子は、松山だけでな

⁹ 『ディ・バラッケ』第 2 巻、鳴門市ドイツ館史料研究会翻訳・刊行、2001 年、197 頁。

く日本の都市全般にある程度共通するものだったと考えてよいだろう。

まず、娘たちが「花嫁修業」のために通う裁縫学校と、銭湯に関する部分を引用する。

私たちがさらに公会堂を通り過ぎていくと、大林寺にたどり着くまでに左側に平屋の家が見えてくる。そこでは約 10 人の少女が座って熱心に仕事をしている。ここは裁縫学校なのだ。学校を出て結婚するまでの間、若い娘たちはここで、日本では妻として当然身につけておかななくてはならないとされる針仕事を習うのである。ほとんどすべての服は洗うときにほどかなくてはならないし、より簡単な衣服は家でも縫えるというのは一般的なことなので、日本の家庭では裁縫は決してなくならないのである。若いときにこの種の学校に何年間か通い、うまくなった妻をもらう男性は幸せ者だ。

私たちが通って行くと、すでに何度か「男」という文字ともうひとつ「女」という文字を掲げた二つの入り口に行きあたる。これは公衆浴場である。昔は、男女いっしょに入っていたが、だいぶ前から日本全国で風呂の入り方も性別で分けてヨーロッパ式に入っている。いくつかの温泉地とか田舎では、まだこの古い慣習が残っている。日本人は可能なかぎり毎日風呂に入るが、毎日というわけにはいかない場合は、一日おきとか二日おきに入っている。日本人は自分の家に浴槽がなければ、このような公衆浴場に行く。お湯は朝方が一番きれいだが、夕方には風呂屋も暗いので、たとえお湯が幾分汚れていても、はっきりは見えないことだろう。もちろん、大きな浴槽に入る前には誰もが石鹸を使い、身体を洗い流す。料金は一回当たり 2 から 5 銭である。

公衆浴場の部分では、かつては混浴がおこなわれていたが、今は様式に男女別になっていること、しかし若干の温泉地や田舎では混浴も残っていることも補足的に説明されている。

当時の外国人が日本について知っている言葉のひとつに「芸者」があったが、書き手はこれに関して次のように解説している。

一台の人力車に出会ったが、14 歳の若い娘が乗っていて、同世代の娘より派手ないでたちをしている。もっとも、その服の仕立て方にはちょっとした逸脱があるのだが、通でなければそれは見抜けない。彼女は芸者、より正確には半玉である。というのも、彼女は若過ぎてさしあたり正規の芸者がするように歌ったり、三味線を弾いたりすることは許されていないからである。こうした若い芸者はただ踊るか、小太鼓を叩いているかである。私たちのようにたとえ鉄条網の中とはいえ、日本にすでに一年以上住んでいる者は、日本女性をみな芸者とみなすという多くの外国人の犯す間違いに陥ったりはしないだろう。芸者は特別の階級で、その仕事は音楽と踊り、余興、つまり茶屋の客を楽しませることである。彼女らの楽器は三味線といって、三弦の撥弦器である。多くの親たちはお金をかせぐために、家を持っている年配の芸者と交渉して、娘をある年限（だいたい 5 年）奉公させる。このような子は、それから年配の芸者の家に入り、みっちり仕込まれる。芸者になるための就学ランクは法律で定められている。そし

て13歳から16ないし17歳になると踊り子、その後唄い手と三味線弾きとなるのである。お客が正真正銘の芸者によるかなり高価な接待を望む場合は、くだんの茶屋が自分の家から芸者を呼ぶ。外国人のなかには芸者を一種の売春婦とみなす人もいるが、ほとんど根拠のないまま広まった誤りである。たしかに多くの芸者の身上はほめられたものではないとしても、この仕事はもっぱらお客を上品にもてなすところにあるのだ。上は貴族に至るまで高位の日本人は、供宴に際して芸者を自分の家に呼ぶことにやぶさかではない。中には身分の高い貴族と結婚する者もいる。

この後、女性のしているお歯黒の風習と、按摩師のことが扱われているが、その部分は省いて、寄席について述べている部分を引用する。

旗に似た大きなポスターが、私たちの注意をもう一つの家の方に向けさせる。その控えの間の壁には、釘がびっしりと打たれている。私たちが通る昼間は、いつも空っぽで閑散としているが、夕方になると7時から11時までの間、ここに客が押し寄せて来る。その釘は履き物を引っ掛けておくためのものだ。中に入るとだいたい10銭から15銭で出しものが見られる。それはわが国のカバレット〔演芸ショー〕と比較するのがもっとも適当だろう。日本人はこの催しを「寄席」と呼んでいる。貧乏な観客にとっては、この寄席はもっとも重要な娯楽の一つである。主だった出しものは歴史ものだ。短い話で、たいていは陽気だが、しばしば歴史的内容も含んだものが名人芸で上演される。ときに音楽演奏とか多彩な演芸とかが催され、また語り手が物語の一部だけを語りの口調で、残りを歌で披露する。活動写真が今や日本の至る所で寄席と競合しているが、寄席はこの戦いで勝利するものと、私は信じている。というのも、その出しものはしばしば実際に芸術的価値を持っているからだ。

ここでも読み手のために、寄席と共通点のあるドイツの催し「カバレット」との比較がなされている。マイスナーは、寄席が庶民のための娯楽であるとともに「芸術的価値」を持つものであると評価している。彼は後に『ディ・バラック』の中で落語の演題「福祿寿」をドイツ語に翻訳している。

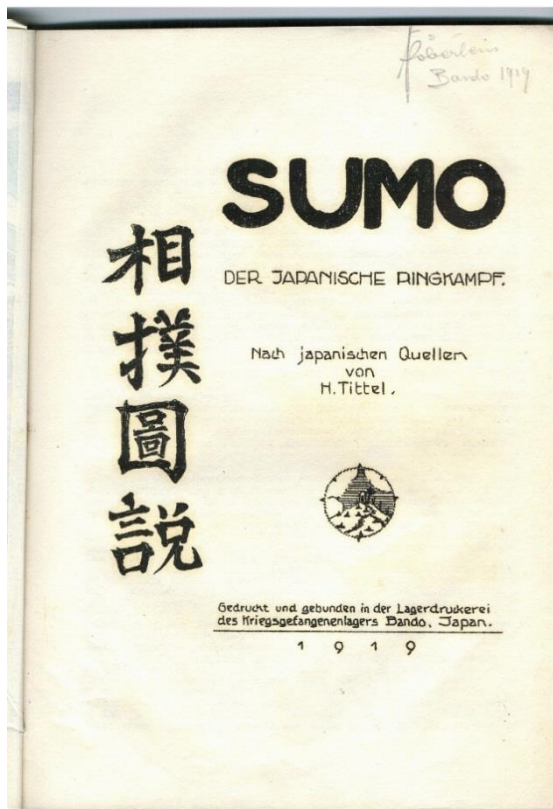
続いて庶民に人気のあるものとして相撲が取り上げられているが、当時は松山にも地上巡業が来ていたのである。

もう一つの重要な大衆娯楽は相撲である。ときおり松山駅前の広場に相撲のテントが見られるが、これは相撲の巡業がこの小さな町を訪れたためである。力士たち—巨大な脂肪と筋肉でパンパンの大男たち—にも、私たちは何度か出くわした。東京では相撲のための巨大な鉄筋コンクリート製のホールがある。このホールは数千人収容できるにもかかわらず、年間チャンピオンを決める日には席を見つけるのが困難である。この日には数時間も経つか経たないうちに号外が出て、結果を報じる。日本中がかたずをのんで、誰が優勝するかを見守っているの

だ。日本の相撲は私たちのレスリングとは異なるルールに則ってなされているが、ここでもある種の掴みだけは許されている。力士たちは腰巻をしているだけで、あとは裸である。女相撲の興行もあるが、たしかにたいへんコミカルではあるものの、太った男の力士に比べると見劣りがする。

力士たちは、たいていまだ髷を結っている。他の多くの日本人は、何十年も前からこの風習を止めてしまっている。私たちがまだ今力士たちの頭に見ているような髷は、昔から中国の長い弁髪のようなのではなく、後頭部の髪が髷になって頭蓋の上で前方に突き出されていた。(Ia, 70-79)

相撲については、別の記事「相撲と柔道」(I巻13号)で、やや詳しく解説されている。ここで興味深いのは、力士について次のような説明がなされていることである。



われわれみんなが絵で見てきたような巨大な体型の太った力士たちは、小柄な日本人とは別の人種に属しているのではという考えを多くの人に抱かせた。しかし、そうではない。

力士たちの体格が、一般の日本人に比べて並外れて大きいために、別の人種だという説も外国では流布していたということを推測させる。また、この記事では相撲の「部屋」からなる組織全体を「ギルド」(同業組合)と自分たちの言葉でわかりやすく説明しようとしている。ちなみに、のちに板東収容所で『相撲図説』という本が、アジアの諸言語や事情に通じていたティッテルによって執筆され、印刷された。ティッテルは丸亀収容所にいた人である。

『相撲図説』の扉(鳴門市ドイツ館所蔵)



後ろにいる捕虜たちとともに撮影された力士たち。おそらく地方巡業中に徳島か板東で撮られたもの。(鳴門市ドイツ館所蔵)

力士はギルドに組織化される。ギルドは東京にきわめて大きな国技館を有し、秋と1月に、番付のための対戦が行われる。国技館は数千人を収容でき、客席は円形劇場のように配置され、中央に約20平米の土俵が少し高めに設置されている。相手を土俵から押し出した者が勝者となる。投げ出すことは要求されない。土俵入りの儀式のあと、対戦が始まる。土俵入りでは、力士は堂々たる前垂れを着け、太刀を持って登場する。勝者には、観客から帽子、衣類など、すぐに手をつかめるものが投げ入れられる。酒や料理と交換できるような証書が投げられることもある。どの観客も最頂の力士がおり、かけ声をかけて声援を送るが、ファン同士で暴力沙汰にまでなることもよくある。

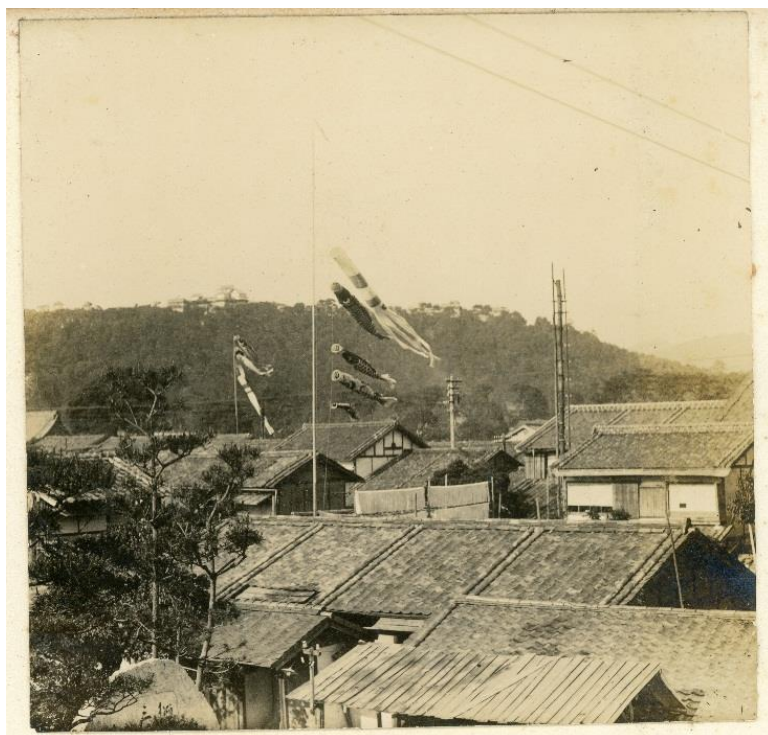
五月の節句

『ラーガーフォイアー』には、折々に催される日本の伝統的な年中行事に関する記事もあるが、この点は徳島収容所の『トクシマ・アンツァイガー』と共通しており、ここでは盆踊り（現在の阿波踊り）や花見なども扱われている。ここでは、「男の子の祭り（五月の節句）」という記事（I巻21号）を挙げてみよう。ここでは鯉のぼりが「大きな紙の魚」と呼ばれている。記事の筆者は上の引用と同じくクルト・マイスナーである。

多くの文筆家たちが、日本を子供の天国と呼んだ。そうした子供たちや文章に接すると、

自分たちの子供時代の素晴らしい日々、クリスマス、誕生日などを無意識のうちに思い浮かべ、日本の男の子や女の子のための同じような祝祭日を捜し求めるのである。

あまり過去に遡らなくても、大きな紙の魚を思い起こすだけでいい。この魚は、6月5日（旧暦では5月5日）まで松山のたくさんの屋根の上で風に翻っていた¹⁰。高い竹竿に何匹かの巨大な魚がよく風になびいていた。開いた魚の口に風が強く吹き込み、大きな魚の姿を見せてくれる。かなり以前、ある文筆家は、魚の数がその家の男の子の数と一致すると信じていた。この文筆家の本から他の文筆家も引用したので、このでたらめな作り話を信じている外国人もたくさんいる。しかしこれは誤りである。10歳未満の男の子がひとりしかいない家庭でも、所有しているすべての魚を掲げる。たいていは、その家庭の友人たちからの贈り物である。こうした魚の値段は全然安くないので、魚の数から推測されるのは、息子の数ではなくむしろ裕福な友人の数である。



松山城を背景に撮られた鯉のぼりの写真。

(フィンドルフのアルバムより。鳴門市ドイツ館所蔵)

この部分でも、誤った説（こいのぼりの数がその家の男の子の数を表しているという説）が訂正されている。

これに続く部分は、この行事が由来している神話・伝説をわかりやすく解説している。

何千年もの昔、インドにあったある滝は、落差がとても大きく、流れも激しかったので、

¹⁰ この記事が掲載された号は6月18日に発行されているので、鯉のぼりが掲げられていたのはごく最近のことになる。

最強の鯉でさえその滝を昇ることができなかった。この竜門の滝を泳いで昇り切る魚がいれば、川の神に格上げされることは明白だった。かつて、力の強い鯉がこの不可能に思える行為を可能にしようと試みた。何年もの間、この鯉は滝の下で無駄な努力を重ねた。滝の上に桃の木があり、その木から落ちた花びらが滝の下に流れ落ちた。その花で鯉は何年も栄養を蓄えた。そしてついに目標を達成し、竜門の滝の上まで昇り、川の神となった。——これが昔の物語の内容である。

それゆえ今日、鯉は力のシンボル、粘り強い努力のシンボルと見なされている。それで、手を抜くことなく絶えず努力する人間は、最後には必ず目標に到達するであろうという模範を、この鯉が男の子に示すというわけである。(Ia, 436-438)

紙面の都合上、あまり多くの記事を挙げることはできなかった。しかし、松山のドイツ兵捕虜の幾人かが、諸々の制約にもかかわらず日本や松山周辺のさまざまなことに関心を持ち、文献まで調査して、その結果を仲間の捕虜たちにわかりやすく伝えようと努めていることが窺われるであろう。このような仕事は、四国遍路に関する記事についてその一端を示したように、後の板東収容所の『ディ・バラッケ』へと引き継がれる。そこでは、寛容な松江所長の下で、徳島周辺の年中行事や地質学、産業（養蚕業など）などに関する調査や、展覧会や遠足にともなう日本人との交流に関する報告が、いっそう活発におこなわれることになるのである。